日本国民文学全集　15

南総里見八犬伝

上

白井喬二訳

河出書房版

日本国民文学全集　第十五巻　南総里見八犬伝　上巻

昭和三十一年三月二十五日初版発行

定価三四〇円

訳者　白井喬二

発行者　河出孝雄
東京都千代田区神田小川町三ノ八

印刷者　川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八

発行所　株式会社　河出書房
東京都千代田区神田小川町三ノ八　電話(二九)三七二一番　振替東京一〇八〇二番

図書印刷株式会社印刷・小高製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

南総里見八犬伝　上巻

第一輯　三
第二輯　三六
第三輯　五五
第四輯　一〇一
第五輯　一六〇
第六輯　二二二
第七輯　二六八
第八輯　三二九

解說　麻生磯次　三七

裝幀　原弘

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

南総里見八犬伝

上巻

第一輯　巻之一

第一回

季基訓を遺して節に死す
白龍雲を挾みて南に帰く

後花園天皇の御代永享十年のことであった。

京都にいた六代将軍足利義教と、関東管領として鎌倉にいた足利持氏との間が不和となって、事ごとにいがみ合った。そして、あげくのはて合戦となった。この合戦で、持氏は、将軍方についていたわが家来の上杉憲実に攻めたてられて、鎌倉の報国寺でとうとう詰腹を切らされた。これは翌十一年の三月十日のことだった。

このとき、長男の義成は父持氏とともに自害したが、二男の春王と三男の安王は、あやうく敵軍の囲みをのがれて、下総の国に落ちのびた。というのは、この土地には持氏の家来結城氏朝がいたからであった。氏朝は義を知る武士であったから、早速主君のわすれがたみ二人を迎え奉じて、京都側の命令に従おうとしなかったばかりか、やがて攻め寄せて来た追っ手の大軍にも屈せず、迎えうけて勇敢に闘った。さればそれを聞いて、里見季基をはじめ持氏にかねて恩顧のあった武士どもは、死をも辞せずわれもわれもとばかり走せあつまってきて、一団となって防ぎ戦ったので、結城の城はいっかな陥いる気配もなかった。

籠城すること、永享十一年の春のころから、嘉吉元年の四月まで、前後実に三年の長きにおよんだ。けれど孤立無援――そうそうは守りつづけられるものではなかった。第一、もう兵糧も矢種もつきてしまった。

ある日ついに、一の木戸やぶれ、二の木戸やぶれ、敵兵はどんどんと城内にはいってきた。結城の一族、里見の主従、今はこれまでと覚悟をきめ、木戸おしひらいておのおの切って出たので、見る見るうちに味方の屍は山をきずき、たちまち城は陥ちてしまった。

俗にいうこれが結城の合戦である。

里見季基も、落城と見ると、いざ最後の一戦とばかり馬にむち入れて走り出ようとした時、ちょうど目の前で長男の義実も、やはり討死のかくごらしく、獅子奮迅のいきおいで戦っていたが、さらに敵陣深く追いすがろうとするところだった。

「おお又太郎、まて――」

と季基は思わず馬上からよびとめた。せがれの治部大夫義実、このときはまだ十九歳の又太郎御曹子。そう呼ぶ方がふさわしかった。

「はっ父上、わたくしもごいっしょに。」

「おろかもの、親子もろともここで死んだら、里見の家はだれがつぐぞ。京鎌倉を敵としてこれだけ戦えば、武士の面目はもはやじゅうぶん。父は節義のために死ぬが、子は後日をかんがえ、ひとまずここを落ちのびて、時機をまって、里見家再興をはかるこそ汝のつとめとわからぬか。」

烈しくしかられて、義実は鞍の上に頭を低くたれ、そしてその首を少しく左右にふった。

「いえ父上、その儀は私とてわからぬではありませぬ。しかしながら、逃れることなら三歳の童児もできますが、大切なは死すべき時に死すことかと心得ます。文武の道、順逆の理、かねてのわきまえから申してもぜひぜひこのまま冥土のお供つかまつりとうございます。」

「まだわからぬか。」

季基はしきりと嘆息した。しかしそれはまた感動でもあった。せがれの顔をつくづくと見詰めて、よく成人したものだと、腹の中でたのもしく思って欣びにたえなかったが、今はここで長談義の余裕はなかった。口ではわざと怒った語気をつかって、強くしかりつけ、かつ、さとして聞かせた。

「これでもわからねば、もはや親でもない子でもない。」

とまで最後に言い切った。

こうなっては義実も父に逆らうわけには行かなかった。はっ――とばかり、馬の鬣に取りすがってさめざめと落す涙、その間に父季基は乱軍の中へと影を消した。

「いざ、若殿――」

悲痛にくれる義実の両わきにすばやく駈け寄って、馬のくつわを取ったのは、譜代の老臣である杉倉木曽介氏元と、堀内蔵人貞行の両人であった。さあ、お供つかまつらん――と口早にいざなった。そして、そのままとうとう馬を走らせ西をさして落ちて行った。

ふりかえれば結城の城のやぐらは、はやえんえんとひと筋赤い炎をあげてもえさかり凄い黒煙につつまれていた。父はおそらく戦死したであろう。里見冠者義実はあとに心を引かれながら、のがれのがれて、相模の国は三浦の矢取の海辺にたどりついたときは、嘉吉元年四月十七日の日はもうしずみかけ、夏がすみがしずかに夕ぐれの海をこめ、白いカモメの眠るのであろう、ときどき鳴く音も聞えて打って変った平和なのどかさが、そこに在った。

「若殿、あれが安房の山々でございます。」

ゆびさして、堀内蔵人がいった。かなたにぼんやりうかぶ鋸山、まことにノミでけずったような緑と土くれの絶壁の眺めだった。だが義実は、やがて、いつまでも安閑と眺めておられる旅の身そらでないと気がついたか、急に口を切った。

「そうだ。くらんど、きそのすけ両人。」

「はっ。」

「安房へわたろう。安房へわたって里見家再興をはかろう。」

「いかにも。それがよろしゅうございます。」

「しからば木曽介、舟をさがしてまいれ。」

はっと答えて杉倉木曽介は舟をさがしに出かけた。

実をいえば舟も舟だが、食べものにも餓えていた。家来のぶんざいとしては、自分はともかくとして主君へなにか適当な食べものを進らせねばならぬ。しかし、舟一艘みつからぬばかりか、ひとかけの糧さえ手にはいらなかった。あげくのはて、木曽介は十四五歳ぐらいの漁場の悪太郎に出逢って、合戦続きでさんざん荒しておきながら、ばかこけ、舟も食物もあるもんかと毒づかれ、かっと怒って喧嘩になってしまった。悪太郎はどこまでも悪たいに強気の奴と見えて、これでもくらえと、地面から土の固りを掻きとってエイとばかり投げつけた。それが運わるく木曽介の頭の上を越えて、いつか近寄って向うの松の根元に腰かけていた義実の胸元にはっしと当ろうとしたが、そこは武芸に長けた義実、ひらりと身を反らして右手でなんなく受けとめた。

「おのれ主君にむかって無礼千万な――」

木曽介はもはやがまんがならぬと、刀の柄に手をかけて、悪太郎にむかってさっと走りよろうとした途端であった。

「まて木曽介、おとなげないぞ――」

義実が、いそいでさえぎりとめた。

「きりんも老いては駑馬におとり、鳳凰もよわれば螳螂(かまきり)にさえ苦しめられると言うではないか。昨日はきのう、今日はきょう、よるべなき現在のわが身をわすれたか。それにものはかんがえかた一つじゃ、土はこれもともと国の基である、これから安房へ渡ろうとしている時、土を身に蒙るとはいかにもめでたいはなし、天その国を賜うのきざしと見てよい。そうとすればそこの小僧を憎むよりも、むしろ礼をいってやってもよいわけのものだ――ありがたし、ありがたし。」

義実は手のひらの土くれを三度ばかりおしいただいて、そのまま懐の中にさし入れてしまった。

「はっ――まことに、おそれいりました。」

木曽介も、若いに似合わぬ主君の幅のあることばに教えられて、思わず刀の柄から手をはなし、頭をさげて心中ひそかに感心した。

そのとき、海の方がとつぜん荒れ模様となってきた。やがてしのつく雨、稲妻さえひらめき、はては雷がなりはためいたかと思うと、むら雲立つ中に、何かきらきらと光るものがあった。目のせいか、気のまよいかはわからぬが、その光りものは龍のうろこのように見えた。いや、たしかに白龍と思えるものが、ひとつ、波しぶきを巻きあげ、雲をかきわけるようにして南をさして飛び去った。

「あっ、りゅう……」

「うん。そちがたの目にも、そう見えたか。」

義実は勇みたつ声でさけんだ。龍は神物であるから、これも吉祥にちがいない、必定わが

家の興る前ぶれであろうと、主従はいろいろと古事を引合いによろこんで語り合い、されば堀内蔵人が船を求めに出かけると、こんどはうまく一艘さがしあてた。そのとき、雨後の空はさわやかに晴れて、月もよく風もよく、清い光の水にうつるなかを、舟はなめらかにはしって、やがて主従はつつがなく安房の地についた。

第二回

一箭を飛して俠者白馬を悞　両郡を奪うて賊臣朱門に倚

安房は三方を海に囲まれた一握りにできそうな小さい国であった。

房総半島の南のはてにあるためも加わってか、北につらなる上総下総の両国は国土広漠としていて桑を植えるによく、自然と養蚕の業が早くからおこり、古くは総をもって世の貢としていたところから、ずっと大昔には上下に二分されないで単に総の国とよばれていたのにひきかえ、安房は住民も稀で、もともと四国の阿波の国の民をわざわざここに遷したので、そのまま語呂も同じにひびく安房の国と呼んだのだと言い伝えられているのである。

そのほぼ東岸には長狭、朝夷の二郡、西岸には平群、安房の二郡がそれぞれ南北につらなり、併せてもわずかに四郡の小国ながら山山に限られているので、なかなか幽邃な土地柄をほこっているのであった。

ところがよくしたもので、こんな辺鄙な国であればこそ、遠くさかのぼって平家全盛の昔、治承三年は秋の八月、源氏再興の旗挙げがならず石橋山の戦にやぶれた源頼朝が、敗残の身をかろうじてこの安房に寄せたとき、この国の土豪であった麻呂、安西、東条の三氏がまっさきにはせつけて無二の志をささげたのであった。その功によって源氏が天下統一の後は安房四郡をそれぞれに分ちあたえられて以来、ずっと永い間というもの、はげしい世の有為転変の波にもかえって襲われずに済んできたともいえるのであった。

さて義実主従がのがれて安房についたころは、平群の滝田の城は東条の一族である神余氏がうけついで、当代の城主は神余長狭介光弘であった。それから館山の城主は安西三郎大夫景連、平舘の城主は麻呂小五郎兵衛信時で、さながらかなえの足のように対立していた。中でも神余のいきおいがもっともさかんで、本家東条の領地もあわせて、ほとんど安房の半ばを領し、安西、麻呂の両家をおさえて安房の国主として臨んでいたときであった。

ところがこの長狭介光弘は心おごって酒色にふけり、側女の玉梓という淫婦に心をうばわれて家来の賞罪のことまで口ばしを入れさせたので、心ある良臣はみな去り、あとに残る側臣は佞人ばかりとなってしまった。中でも山下柵左衛門定包という色白く鼻高くくちびるの赤い言葉づかいの極く柔和な家来は、うまく玉梓にとりいってひそかに姦を通じ、あげくのはて主君の光弘を殺して、自分が滝田の城主になろうという不敵の考えをいだくにいたった。すると滝田の近村蒼海巷に住む杣木朴平というものがあったが、百姓ながら武術にすぐれて、気概にみちた男だったので、同志洲崎無垢三とかたらって、領内の平和をたもつために定包を討ちとることを思いたった。ある日定包が主君と共に遊山に出かけたときをねらって矢を放ったが、運わるくその矢は定包にあたらず、あやまって主君の光弘にあたって殺してしまった。定包にとってはみずから手を下さずして思う壺にはまったと言えるのであった。

けれど元より定包はそんな気ぶりは露ほども表わさず、樹蔭にかくれていてヒュウと矢を放つと、腕前の勝れぬため、矢は少しねらいが外れて朴平の股のあたりにグザと刺さった。定包はそのとき始めて樹蔭から姿をあらわして声高らかにさけんだのであった。

「やあやあ。国のためには数代にわたる主人、民のためには父母にもあたる尊い殿を、害い奉るとはなんたる逆賊そ、ここに山下柵左衛門定包あり――ただいまの一矢は、わざと生け捕るために急所をはずしたのである。それ者ども、かやつに駈け寄って容赦なくひっとらえよ。」

わっと鬨の声をあげて、兵どもはおしよせた。杣木朴平はもとより命を捨ててかかって

いることだから、兵などには恐れはしないが、この時はじめて、さっき射落したのは主君の光弘で、当の定包は無事であることを知って、さすがにびっくり仰天した。

「や、さては仕損じたか。鵜の嘴のくいちがいとはこのことであろう。無念だ残念だ――」

地団太ふんでなおも戦ったが、多勢には敵しがたく同志の無垢三はうちとられ、朴平はついに捕われて牢に引かれて行き、そこで拷問にかけられた末、痛手にたえやらず即日死亡したのであった。二人の首はさっそく青竹の先につらぬかれて梟首にされ、これでこの騒動もひとまず終りをつげた。儲けものをしたのは悪運の強い定包であった。その後いろいろと手段を用いて、まんまと安房の国主になりすましてしまった。

定包の国主ぶりはまことに言語道断であった。まず滝田の城を玉下城と改名した。自分の山下の下の字に、淫婦玉梓の玉をくっつけたのである。そしてその玉梓を本妻としたばかりか、光弘時代の他の妾どもは、そのまま全部自分の妾として枕席にはべらせた。家来には誓書をかかせて血判をおさせるやら、酒宴の席では、やたらと褒美をさずけ物慾で威を張ることに専念するという有様で、そのやり口は一国のあるじとしてとうてい風上におけるものではなかった。

人間の野心はとどまり知れないものである。彼は城内の富貴歓楽だけでは満足することができず、威を近隣に示そうと思いたった。そこで隣郡の舘山平舘へ使者をつかわしてこういってやった。定包は不肖にして、こんど思いがけなく長狭平群の主となった。そこで御両君と親交をむすぶ必要があると思うが、当方から出むいて行こうか、それとも御両君の方からやって参らるるか否や、というのであった。言葉は表面おだやかだが、その底は威赫であるから、受けとった方では無礼を感じないはずはなかった。

そこで平舘の城主麻呂小五郎信時は、ぐっとこたえたものか、ある日、舘山の城主安西景連をたずねて、どうしたものか、定包との対抗策について相談を持ちかけた。というより、むしろこの際、一挙に彼を討とうというふうに積極的にはたらきかけたのであった。

「おぬしと、力を合せたなら、定包のごとき何事かあろうと思う。安房朝夷の軍勢の前には滝田の城などしばしがほども持ちこたえられるものではあるまいぞ。安西殿、のうどうか、おぬしの考えは。」

「いや、その心はわしも同感だが、急に攻めたてることは険呑であろう。おぬしは安房朝夷の軍勢というが、ここのところ泰平つづきだから、その士卒軍馬がどのへんまで使用にたえるかも疑問ではないか。」

「これはしたり、意外にも気弱のことを申さるる。」

二人はしばらく意見をたたかわした。

意見の一致はなかなか見なかった。麻呂は利にさとく、どっちかというと勇将という側であるが、少々人を軽蔑するくせがあった。それに比べると安西の方は思慮もあり謀略にも長けていたが、何ぶん年を取りすぎておる上に、少々性質がぐずであったから、この相談はなかなかまとまらなかった。

この押問答の最中、はたはたと、廊下に足音がきこえて安西の家来が室外に伺候した。主人の安西は障子をあけさせて、客人にあいさつをさせたうえ、なんの用かと問うた。

「ただ今、里見又太郎義実と名乗る武士が、おとずれてまいりました。」

「なに里見義実が。」

主客とも、その名を聞いて同時につぶやいた。

「はい、見たところ十八九歳かと思われます。従者はわずかに二人、下総結城の落人なりと申しつげております。」

「ほう、では相模路をへめぐってでも到着したものかな。」

「三浦より渡海して、当国白浜へ着いた由にございます。」

「して、何の用事でたずね参ったと申している。」

「用事は主人に見参の上にてとのことで、答えませんでした。いかが取計らいましょう。」

「はて――」

と安西景連は、とっさに取計らいの決断がつ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

かないか、小首をかたむけ、はては眉までひそめて、しばらくは思案沈吟のていであった。

巻之二

第三回

景連信時暗に義実を阻む
氏元貞行厄に舘山に従う

義実が頼って来たとのことを聞いていた客人の麻呂信時は、思案のつかずにいる景連にむかって、こう言葉をはさんだ。

「里見は名ある源氏ではあるが、ここには縁も誼みもない。それに親の討たれるのも見返らずおめおめ逃げかくれて流浪うごとき義実である。対面し給うな。」

「しかし彼は名に負う勇将であるから、一応対面して、もしわれらの下に使える者ならば、定包討伐の一方の将としてはいかがでござろう。もしまた会って気に入らねば、その時は亡ぼすばかりだ。」

「なるほど。よし、それもよかろう。」

信時はうなずいて賛成した。

そこで対面となると、相手が実戦の場数をふんだ勇将づれであるだけに、こちらとしても警戒を要した。物々しい警護の士を張りこませたりして、準備万端やっとととのうと、義実主従をはじめて座敷の中にみちびき入れた。

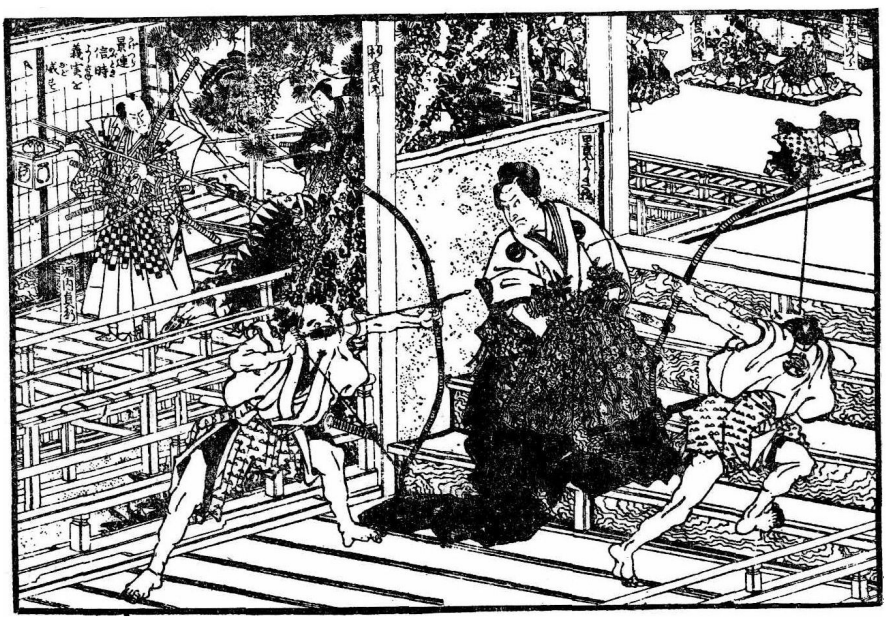
義実はこの大袈裟な警戒をそれと察したが、少しも動揺の色もなく、これはこれは大層なおもてなしと余裕綽々につぶやきながら、安西、麻呂両将の前にぴたりと坐って二人の従者たちをそれぞれ引合わせてから、礼儀正しく対面の礼をのべることを忘れなかった。

「お会い下されてかたじけない。結城の敗将、里見又太郎義実、亡父治部少輔季基の遺言によって、生くべきでない身を、敵軍の囲みからのがれて走り、漂泊の末にここへ参じた次第でござる。厚くお礼を申し述べつかまつる。」

「ここを目指して参られたる次第は。」

景連は、じっと見詰めながらそういって問い返した。

「そのことでござる。なんと申すこともなけれど、ただ御当国は、都はさらなり、鎌倉管領にも属さず、まったくの自由の天地。ここに頼って安国の民となるこそこの上もなき幸いと思った



からでござる。ところが、到着して見て必ずしもさにあらずと感じ申した。」
「さにあらずとは。」
「ここにはここの波乱あり、自然と耳にふれる巷談街説、それもよしこれもよいが、武士は武芸を志すものゆえ、義によって一臂のちからをつくすこともあらばと存じ、思わず虎威をおかして参上つかまつった次第。敗軍の将をきらわず対面をおゆるし給わった寛度、かたじけなくぞんずる。」
義実のいうことは謙譲だったが、態度は堂堂としていた。扇を右手ににぎって膝の上にきちんとおき、わるびれたふうは少しもなく、若年に似あわず歯切れのよい口調で、なにものにも怖れぬ毅然たるちからがからだ全体からあふれ、計り知れない知略のほどを思わすものがあった。
そのとき目を光らせていた麻呂信時が、主人席の横から口を入れて言った。
「これ客人待たれい。当国は三面すべて海であるから、室町殿からも管領からも犯されぬという意味か。それならば一知半解、われらは隣国の強敵にも犯されずに今日までの日を過してきているのじゃ。」
「それは存じております。」
「存じておるなら、貴公から国内の安泰を説かれる義理はない。第一、身のおきどころがないからといって、縁もゆかりもない、それも罪人同然の者を救って、わざわざ祟りを後日に招くようなことをするのは馬鹿げている。わしはこの対面は反対であった。」
地金を現わして信時はののしった。
けれど、義実はにっこり笑って臆しなかった。今までと変りのない態度で、自分が結城の城にたてこもったのは、義の一字を守るためだと言った。鎌倉の管領持氏卿が、世にさかんなころは、安房上総はいうまでもなく、八州の武士はたれ一人として、腰をかがめ、へつらい、出仕しない者はなかった。それだのに、一たん持氏が滅亡したとなると、誰も恩ある昔を顧みようとしなかった。その中で、わが父季基は幼君のおんために、家をわすれ身をすて、氏朝に力を合わせて、結城の城にたて籠って義を全うしたのである。だが勢いにつくは人心、麻呂、安西の御両所が、私を救うては後日の祟りをおそれると言うならば、それまでのはなし。それがしは、和議をあきらめ、縁なきものと思い袖をはらってこれよりただちに辞去いたす、ときっぱりした口調で答えた。
「これ客人、お待ちあれ。」
景連は立ち上ろうとする義実を、いそいで押しとどめた。
信時の方は、それとみると一層腹立たしげに、なおも義実をののしった。けれど景連は胸に一物というのか、そっと信時をなだめ、さらに義実にむかっていった。
「そなたは、かつて結城の守将ではあったろうが、今はともかく流浪の人だ。わが陣に加わって、この土地の悪将滝田の城の定包を討つとならば、それはやはり、まずわが軍令に従わねばなるまい。元より、おぬしの力で大功を立てた暁には、二郡の主となっても少しも異存はない。さあどうじゃ、それでも去るか、それともここに留まるか。」
「わかりました。仰せのとおり寄る辺なき身の上、ここに留まりましょう。留まるからには万事お指図に従うことにいたそう。」
「よくぞ申した。」
景連は満足そうにうなずいてから言った。
「しからば、わが家の嘉例として出陣の首途に、まずもって軍神に鯉を供えたい。三日のうちに貴殿が手ずから釣りあげて来られよ。約束を違えたならば和議の志なしと見て容赦なく処置いたすかも知れぬぞ。」
これはすこぶる難題だった。なぜならば安房一円どこへ行っても土地がらとして鯉はいないとわかっていた。それを見越しての申し条であるから、約を果さなかった時は、いい口実にして主従の首を刎ねようという悪辣な魂胆であった。
「いや心得ました。鯉をとらえて参ろう。」
そうとは知らぬ義実は、気軽に承知してしまったが、納まらぬは氏元、貞行の二人の老党であった。事もあろうに主君を漁師扱いにする彼らの非礼なやりくちに、思わずかっと憤って、ここをすみやかに見限って上総へ参り

ましょうと、袖に縋らんばかりにしきりとすすめたが、義実は左右の二人を顧みて静かになだめた。

「はやまるまいぞ、両人。君子は時を得て楽しみ、また時を失うても楽しむと聞く。いにしえ太公望のごとき人傑でさえ七十近くまでも世に知られず、渭浜の里に空しく釣をしていたではないか。漁を卑しむことはない。」と、言い聞かせひたすら釣の用意をうながすのであった。

第四回　小湊に義実義を聚む　笹内に孝吉讐を逐う

鯉は出世魚といわれる。鯉が川をさかのぼって、滝にかかると鯉はたちまち龍となって天にのぼるという。義実は、すでに一度三浦の海浜で龍と思えるものを見たことがある。ここでみごと鯉をつりあげたら、申しぶんがないわけだが、しかし今いったように、鯉の棲息しない国で鯉を釣ろうというのは始めから無理な話であった。

義実主従は毎日足をはこんで、あの淵この川岸に立ちつくして、朝から晩まで糸をたれ竿を握ったが、ほかの魚はいくらでも釣れるのだが、鯉は一匹もかからなかった。今日で三日目、長狭の白箸川の岸辺に来て、しんぼうづよくやってみたが、やっぱり駄目だった。

「今日が三日目か。」

「期限の日でございまする。」

主従は顔を見合せて思わず溜め息をつくのであった。

「敗軍の将は鯉まで相手にせぬか。」

「と申すよりは、安西、麻呂の誠意が疑わしゅうございます。むしろ、このままこの土地を立ち去った方がよくはございませぬか。」

「いや、やはりここに辛抱いたそう。何ごとも時のくるまでは、忍耐が肝心である。」

元よりいらだつ心は同じだが、義実はこう言って二人の老党を制した。どこへ行っても漂浪の身には、また別な困難がそこで待ち受けているかも知れないと、この若い主人は世を達観しているように見えた。

「はい。」

家来も拒みがたくやっと心を鎮めた。このとき、はるか河下から、誰か何か唄いながらやってくる者があった。

耳をすまして近寄るのを待っていると、どうやらその者は同じ歌をくり返しくり返し唄っているらしく、だんだんと文句が聞きとれて来た。

里見えて、里見えて
白帆走らせ、風もよし
安房のみなとに寄る船は
浪にくだけず潮にも朽ちず
人もこそ引け、われも引かなん

「ほう……」義実は異様な気持にとらわれた。それはまず冒頭の「里見えて」というのは、偶然かも知れないが自分の姓名に片寄せたように思えたからだった。気の迷いかも知れない、となおもその人物の現われるのを待っていると、やがて姿が目の前に近づいて立ち停った。よく見るとそれは一人の乞食風態の者だった。

もちろん、乞食だからぼろを着ているばかりか、顔や手足に瘡ぶたの痕などがあってどう見てもずいぶん穢ない男だった。

乞食はそこに立ってじっと義実の釣のありさまを見ていたが、とうとう覗きこむようにして言った。

「なぜ、せっかく釣った魚を、そのように捨てなさるのだ。鮒もエビも、川魚としてはまず上の部じゃのに、さてさて心得ぬ人たちだ。」

「わしが釣りたいのは鯉だからだ。」

義実が正直なことを答えると、乞食は無遠慮に前に屈むような恰好をして声高らかに笑い出してしまった。

「なに鯉を釣るのだと。ははは、この土地で鯉を求むるのは、ちょうど佐渡で狐を捕えようとし、伊豆の大島で馬をさがすに似ておる。労して功なきことだ、おやめなさい。安房一国には土地柄で鯉は生ぜぬわ、それを知らぬとは迂闊千万の仁じゃ。また、鯉は魚の王で、一国千郡に充たぬ所には棲まぬとさえ、昔から言い伝えられておるほどじゃ。それも知られぬかな。」

なかなか物識りの乞食である。義実はそれ

を聞いて思わず竿を引き上げてしまった。なるほど、言われてみるとこれで麻呂、安西の魂胆がよめた。今までそれに気がつかなかった自分の不覚が急に恥かしくなった。乞食はその様子を察してか、やや顔色を柔らげなぐさめ顔に言った。

「いやしかしな、一国十郡にみたねば鯉は棲まぬというのは、おそらく牽強附会じゃろう。その証拠には陸奥は五十四郡なのにやはり鯉はおらぬ。鯉の反対に人間は十戸の村でも結構忠臣孝子があらわれる。また里見の御曹子が上毛に生れながら、こんな所に漂泊って膝をいれる余地もないというのも、考えてみれば理に合わぬおかしな話だ。」

「や、ではそなたはわしの名を里見と知って言わるることか。もしそうなら誰か名乗れ。」

「いや、それではお答えいたすが、実はうすうす存じてこれへ参りました。まず人目なき木蔭へ参り、つぶさにお話しつかまつろう。いざかなたへ。」

そう言って先に立ってさそった。主従はそれに随って山路へさしかかり、座を定めてまともに応待した。乞食はここに至ってはじめて里見義実と見こんでこれへ来た旨を、ちくいち語り明かしたのであった。

「それがしは実は、神余長狭介光弘の臣金碗八郎孝吉と申す者のなれのはて。父は老臣の第一席にすわる身分でござったが、その父死亡後、私は年少のため微禄となり近習に出仕しておりました。そのうち、主君の行状は日に日にみだれ、淫婦玉梓の色香におぼれて、日夜の酒池肉林、ついに佞人山下定包を重用して政務は手のつけられぬ乱麻の有様となりました。この儀お聞き及びではありませぬか。」

「うわさは、この土地に入るや否や、すぐ耳にいたした。暗君のある所、みなそれだ。」

「はい。で、私、おこがましいけれど、身をもって殿を切諫いたしましたところ、とうてい納れられぬばかりか、身の危険をさえ感じて参りましたので、やむなく城を退いて他へ逐電、そのままちょうど五年の月日を経過いたしました。そのうち主家はついに滅亡。それも、奸臣定包とあやまって主君を射たる朴平、無垢三の両人は百姓ながら、父の代には一ど若党としてわが家に召使ったことのある者ども。されば両人の無念を晴らすためにも、城を乗っとって今を時めく定包を討たねばなりませぬ。けれど、私は城中にひろく顔を見知られておりますゆえ、狙えど容易に近づくすべもなく、困じはてた末、ご覧のとおり全身にうるしの汁を塗って姿を醜くやつし、ひそかに機を狙っていたところ、時こそ来たれ。それは、あなた様の当地入国のおうわさです。」

「ふん、なるほど。」

「里見義実公、結城を落ちてはるばる渡り越されしと聞くからに、私をどんなに喜ばせ、かつ勇気づけたことでしょう。かかる名君を擁して義兵を起したなら、悪政になやむ民たちはたちどころにみな君を慕い寄るは火を見るよりも明らかでございます。たとえ、麻呂や安西のやからが拒もうとも、何ほどのことやありましょう。定包を除いたあとは、安房一国は平和に復し里見の仁徳に国中あげてなびくは必定と信じます。この儀はいかがでございます、なにとぞ御決意のほどを。」

「わかった、やろう。」

やや永い沈思黙考のすえに、義実はきっぱりと答えた。

孝吉の熱意と救民の道理にうごかされて、挙兵ときまったからは、もはや行動は自由である。義実主従は釣道具をなげすてその夜すぐ八郎孝吉と共に小湊におもむいて旗挙げの企てに乗り出した。

小湊は日蓮上人の誕生地で、そこの人々はみなねっしんな日蓮の信者であった。孝吉は路々、さっきの歌の話をして聞かせた。「里見えて里見えて」と唄ったのはあなた方の御様子を探るためにとっさに作ったもので、里見を利かせたことはお察しのとおり。それから「白帆走らせ風もよし」は、白帆は源家の旗になぞらえたもので、旗挙げの縁起のため。「安房の水門へよる船は」の船は、荀子に君は船なり、ということばがございますので、ふとそれをもじったまでの話、いやとんだ拙作をお耳に入れて赤面しごくだと告白した。義実も

学を好む武将であったから、大層この話を面白く聞いた。さて小湊に着いたときは、夏の日もとっくに暮れて、二十日あまりの月が山の端から出かかってまだ出でず、空のみ美しくぼっと明るかった。その時ひびく誕生寺の鐘をかぞえて見て亥の刻（午後十時）だとわかった。

「亥の刻とすれば人ははや寝静まっておろうか。」

「さよう、都ならば夏の夜のこと、まだ涼みをおえますまいが、田舎のことゆえもはや寝入りしことと。」

「いかがいたそう。」

「心得たることがございます」

孝吉の考えとして竹藪に火を放って、とにかく里人を集めることにしようと言った。平日から多少この土地の知人には吹っこんだことがあるから、人が集まりさえすれば、万事好都合にはこぶ公算が大だと言うのである。義実もためらっている場合でないので、よろしいやろうという気になった。

「しからば、どこの藪に火を放てばよいか。」

「寺より三町ほど離れました、前藪の辺がよろしいかと存じます。」

「よし、そういたせ。」

「は。」

返事と共にそこへ歩み寄ってさっそく打火を切って火を放った。貞行、氏元の二人の老党もそばからこれを手つだった。草は夜露にぬれていたが、竹藪の下には黄色い枯葉がうずたかく積っていたので、火は案外たやすく燃えひろがった。月の出しおの一瞬の闇にぱっとあがる渦炎火柱、梢の小鳥は寝ぐらから驚いて飛びたち、誕生寺の鐘は火災を知らせるためがんがんと早つきに鳴りはためいた。里人はスワとばかり皆戸外にかけ出したが、中にものに恐れぬ土地の若者たちおよそ百五十余人、火のあがる場所を目がけてまっしぐらにかけ集まって来た。

「火事はどこだどこだ。お寺ではないのか。」

「一同しずまれ。おぬしたちの内には顔馴染の者もあろう、かくいうわしは金碗八郎孝吉だ。いや知らぬ人が多ければ素姓を名乗って聞かすほどに、暫時が間どうか静かに聞いてくれ。」

手で制しておいて、おだやかな口調で言った。

「わしはこの国の旧臣であるゆえ、日ごろ領内の衰亡を見るに忍びず、それを救うには暴君定包を討つより法はないと思って、いろいろ苦心に日をかさねて来たものの、何ぶん力弱くて一人ではどうすることもできなんだ。しかるにここに天から降った幸せというか、またとない吉兆にめぐり会った。今それを領内の皆に告げたいと思ったが、一人一人に話している暇がないので、人騒がせながら火を放って集まってもらった次第。一同この心を汲んで、わが願いを聞いてくれ。」

それからそばに立つ義実を引合わせた。文武の良将里見冠者義実とはこの人である、国乱れて忠臣あらわれ、家貧しくて孝子出ずというが、それにも増してこの人の到着は、当国救世の宝も同然と言わねばならぬ。われらのために破邪顕正の力を示して、一国の平和をもたらし、民々の苦しみを救うて下さる決心をかためられた。だがそれには、どうしてもそなた方一同の力を借りねばならぬ。ぜひこのさい一郡の平和のため協力してくれ、と声涙共に下る熱弁をふるった。

義実もこの時一歩前に進み出て、あいさつをした。

「まことに重大事ゆえ、よく考えて子々孫々のため、できることなら助力を頼みたい。さすればわれもまた奮起して必ず一同のために尽すであろう。なにとぞよろしく。」

こういわれて土地の者どもは、しばらく顔見合わせて黙っていたが、そのうち寄りよりにささやき交わしたあげく、やがて村長らしい老人が腰を屈めて前に出で、一同になりかわって答えた。

「はい、お話の筋はよくわかりましてございます。お旗挙げに私ども同心させていただきます。ついては、土地の者といたしましていささか愚案がございますので、一応お聞きねがい上げます。」

そしてその献策というのを語った。そもそも、この長狭の郡は定包の股肱の老党、萎毛酷六と申す者の勢力範囲であって、この酷六

は東条城というのに立籠っている。さればまず定包を討つには手近の東条城を攻めてかかるのが肝心で、この城さえ手に入れることができれば、物具も兵糧も思いのままであるから、挙兵にはまずこれが万全の策だというのであった。

「なるほど、それは武将の軍略とも合致する。よかろう、一同の説を採用して血祭はその策で行くことにしよう。」

義実はながるごとくに裁決した。

そこで、善はいそげ決行は神速にやることになった。今宵これから、村の若者ども百五十余人に武装させ、三隊にわけ、その中の一隊は、わざと金碗孝吉に縄をかけて先頭に歩ませ、むほん人を捕えたと欺いて東条の城門をひらかせ、その機に乗じてドッと攻めこむという作戦だった。

間抬子というのか、これが、まんまと図に当った。作戦どおり城門をひらかせて中にはいると、孝吉を縛めた縄はいつわりだから、自分ではらりと解き、いきなり城兵の刀を引き抜いてハタと斬りたおした。あっと驚く間もなく、どっとあがる喚声とともに義実の老党氏元も貞行も、寄手にまぎれこんで、一緒になってきりまくった。だが義実はそれよりも気にかかるのは敵将菱毛酷六のことだった。これを逃してはならぬ、もし逃したなら滝田の本城に急を告げて定包に戦いの用意をさせるだろう。そうなると、こっちは寡兵だから不利に陥る道理と思って、城内隈なくさがしまわったが酷六の姿はどこにも見当らなかった。

「さてはすでに逃走したか、しくじった。」

と思ったとき、金碗孝吉が、城の外から走せもどって来て、そこへさし出したのを見ると、いま逃したのを残念がったその酷六の首であった。

「逃ぐるを追うて討ち取ってまいりました。」

「おおでかした。これで滝田の城も味方にとって一段と攻めやすくなった。」

義実の喜びに孝吉は陣中大いに面目をほどこした。かくて東条の城もなんなく落ち、おとなしく降服する者は助けてやり、従う意志のある者はえらんで家来とした。味方にはまた手落ちなく恩賞の約束をし、とっさの場合だが義実のやり口は機敏でさすがに名将の器というにふさわしかった。この恩賞の第一番はなんといっても金碗孝吉、第二番は土地の者たちで村長もまじえて三平、四郎治、仁摠と名乗る人々であった。第三番は自分の家来氏元、貞行という順序で、その他こまかい所まですっかり行き届いていた。そうした中にも諸諸味を好むのは若武者のせいでもあろうが、義実は土地者の名を聞いてこんなことを面白そうに呟いた。

「大変いい名である。三平というのは、敵の山下、麻呂、安西の三人を平げるということになる。四郎治はそうだな、四郡を治めるという意味に取ればとれるからめでたい。仁摠はつまり上総下総を後日かならず手に入れる瑞兆でもあろうか。ははは、二人の数字を合すれば三四十二で、十二ヵ村、これを仁を二と見て二倍すれば、二十四ヵ所の主となるわけだ。どうだこの判断を合戦の目印としようか。」

「いや結構な御教書にございます。」

「さても瑞兆ずくめで、かないません。」

一同気をよくして万歳をとなえ、歓喜のうちにいよいよ滝田の城にむかって進軍することになった。東条の城には氏元をのこして守らせ、義実は孝吉、貞行たちと二百騎ばかりをひきいて出かけた。その夜前原浦と浜萩の間にある堺橋のところまで来ると、里見の勢と聞いて野武士や郷士が、百騎二百騎と団を組んで走せ加わり、とうとう千騎余りの軍勢となった。それゆえ、後々までここは名も千騎橋と呼ばれて里見家ゆかりの名勝の一つとなったのであった。

巻之三

第五回

良将策を退け衆兵仁を知る
霊鴿書を伝えて逆賊頭を贈る

さて滝田城攻めの日のことだった。ちょうどそのとき、城主山下柵左衛門定包は、いつものことながら大酒宴を開いていた。何しろ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com